

長期国内視察報告書

～東京都・神奈川県・山梨県・長野県・石川県～

沖縄経済同友会

2021年11月

主催：国際委員会

目 次

1. 視察団名簿 … P 1
2. 視察日程表 … P 2
2021年11月1日(月)～6日(土)
3. 視察総括 … P4
東川平 信雄（国際委員長：株式会社おきぎん経済研究所 代表取締役社長）
4. 視察報告 … P10
 - (1) 防衛省市ヶ谷視察 … P10
 - (2) 新国立競技場視察 … P12
 - (3) 国立科学博物館視察 … P13
 - (4) 海上自衛隊横須賀基地視察 … P14
 - (5) 富士山世界遺産センター視察 … P17
 - (6) 甲州市勝沼ぶどうの丘 … P18
 - (7) 恵林寺・武田神社 … P19
 - (8) 黒部ダム視察 … P20
 - (9) 善光寺 … P22
 - (10) 志賀高原 SDGs 視察 … P23
 - (11) 金沢経済同友会との懇親会 … P25

※ 今回の視察を実施するにあたっては、参加者全員の出発前／帰着後の PCR 検査陰性ならびにワクチン2回接種を確認しています。また、視察報告に掲載されているすべての集合写真については、撮影時のみマスクを外し、速やかに写真撮影を行っております。

1. 視察団名簿

No.	弊会役職	氏名	会社名	役職
1	代表幹事	淵辺 美紀	株式会社ジェイシーシー	代表取締役会長
2	代表幹事	川上 康	株式会社琉球銀行	代表取締役頭取
3	副代表幹事	當銘 春夫	株式会社りゅうせき	代表取締役社長
4	国際委員長	東川平 信雄	株式会社おきぎん経済研究所	代表取締役社長
5	常任幹事	伊東 和美	株式会社りゅうぎん総合研究所	代表取締役社長
6	常任幹事	金城 善輝	株式会社沖縄銀行	代表取締役専務
7	常任幹事	小林 文彦	川崎重工業株式会社 沖縄支社	支社長
8	常任幹事	杉本 健次	株式会社 JTB 沖縄	代表取締役社長執行役員
9	正会員	我如古 正伸	第一総業株式会社	代表取締役社長
10	正会員	宮里 洋介	野村證券株式会社 那覇支店	支店長
11	オブザーバ	佐久本 達哉	沖縄電力株式会社	執行役員
12	オブザーバ	長嶺 輝明	株式会社沖電工	取締役
13	事務局	佐久本 卓弥	沖縄経済同友会	事務局長
14	事務局	仲村 盛健	沖縄経済同友会	事務局次長
15	事務局	伊福 正義	沖縄経済同友会	研究員
16	添乗員	久保田 美音	株式会社 JTB 沖縄	グループリーダー

2. 視察日程表 2021年11月1日(月)~6日(土)

日次	月日曜	行程	食事
1	11/1 (月)	<p>ANA994 貸切バス 貸切バス</p> <p>那覇空港 →→→→ 羽田空港 日本ばし やぶ久 (昼食)</p> <p>10:05 <140> 12:25 13:00 <30> 13:30 14:10 <20></p> <p>貸切バス 貸切バス</p> <p>防衛省市ヶ谷 新国立競技場 東京(泊) (車窓)</p> <p>14:30【90】16:00 <20> 16:20 17:30 <30> 18:00</p> <p>ご宿泊：ザ・プリンスパークタワー東京(1泊2食付/1名1室)</p>	朝：- 昼：○ 夕：○
2	11/2 (火)	<p>貸切バス 貸切バス 貸切バス</p> <p>東京都内ホテル 国立科学博物館 ×ルキュールホテル横須賀 (昼食)</p> <p>8:30 <45> 9:15【135】11:30 <75> 12:45 13:50 <10></p> <p>貸切バス</p> <p>横須賀基地 宮ノ下(泊)</p> <p>14:00【90】15:30 <120> 17:30</p> <p>ご宿泊：富士屋ホテル(1泊2食付/1名1室)</p>	朝：○ 昼：○ 夕：○
3	11/3 (水)	<p>貸切バス 貸切バス 貸切バス</p> <p>富士屋ホテル 富士山世界遺産センター 甲州市勝沼ぶどうの丘 (昼食)</p> <p>8:40 <60> 9:40【60】10:40 <40> 11:20 13:00 <20></p> <p>貸切バス 貸切バス</p> <p>恵林寺・武田神社 桔梗屋 甲府本店 松本市内(泊)</p> <p>13:20 15:40 <20> 16:00 16:20 <100> 18:00</p> <p>ご宿泊：ホテルブエナビスタ(1泊2食付/1名1室)</p>	朝：○ 昼：○ 夕：○
4	11/4 (木)	<p>貸切バス 貸切バス 貸切バス</p> <p>ホテルブエナビスタ 黒部ダム わちがい (昼食)</p> <p>8:15 <90> 9:45 12:30 <45> 13:15 14:15 <90></p> <p>貸切バス</p> <p>善光寺 湯田中(泊)</p> <p>15:45 16:45 <60> 17:45</p> <p>ご宿泊：あぶらや燈千(1泊2食付/1名1室)</p>	朝：○ 昼：○ 夕：○

日次	月日曜	行程						食事
5	11/5 (金)	貸切バス		貸切バス		貸切バス		朝：○ 昼：○ 夕：○
		あぶらや燈千 9:00	志賀高原 SDGs 9:30	蔵部 (昼食) 小布施堂 11:30	12:15	14:00	<30>	
		はくたか 565号		徒歩		ホテル日航金沢 (チイックイン)		
		長野駅 14:30	金沢駅 16:19	14:53	16:50	17:00	17:40	
		松魚亭 【懇親会】 金沢経済同友会 18:00	金沢 (泊) 20:00	<86>	<45>	<30>	<20>	
		ご宿泊：ホテル日航金沢 (1泊朝食付/1名1室)						
6	11/6 (土)	貸切バス		貸切バス		貸切バス		朝：○ 昼：○ 夕：-
		ホテル日航金沢 8:40	兼六園 8:50	本店箔巧館 10:10	11:00	<10>	<15>	
		貸切バス		JTA037		那覇空港		
		大名茶屋 (昼食) 11:15	小松空港 13:00	12:15	14:05	16:40	<45>	
				+ + + + +				
				<155>				

3. 視察総括

東川平 信雄（国際委員長：株式会社おきぎん経済研究所 代表取締役社長）

私たち沖縄経済同友会 瀧辺美紀、川上康両代表幹事を含む視察団 15 名は、2021 年 11 月 1 日から 11 月 6 日までの 6 日間の日程で、国内（東京都・神奈川県・山梨県・長野県・石川県）の各事情を視察しました。国際委員会では、これまで海外ビジネスの可能性及び海外先進地事例の調査研究の一環として海外の視察・調査を行って参りましたが、昨年に引き続き新型コロナウイルス感染予防の観点から国内視察に切り替えて実施しました。

視察先は、主に（1）東京都では、防衛省市ヶ谷地区視察、東京五輪のメイン会場であった新国立競技場視察、沖縄における国立自然史博物館誘致について知見を深めるため、自然史、科学技術史に関する国立唯一の総合科学博物館である国立科学博物館視察、（2）神奈川県では、自由で開かれたインド・太平洋構想（FOIP）を中心に経済及び安全保障の観点から沖縄が持つ地政学的な重要性について理解を深めるため海上自衛隊の横須賀基地を視察、（3）山梨県では、沖縄・奄美の自然遺産登録後の自然保全とその利活用について学ぶため富士山世界自然センターを視察、（4）長野県では、脱炭素に向けた再生エネルギーとしての水力発電の現状や運用について学ぶべく黒部ダムを視察、また自然と人間社会の共存を通し持続可能な社会づくりについて知見を深めるため志賀高原を視察、（5）石川県では、北陸新幹線開通後の経済状況やコロナ後の近距離マイクロツーリズムの可能性を学ぶべく金沢市内の視察など、国内（東京都・神奈川県・山梨県・長野県・石川県）視察・調査を行いました。

視察初日は、那覇空港発、羽田空港着の移動から視察開始です。今回の視察は、コロナ禍での視察となりますのでワクチン接種確認及び出発直前の PCR 検査を実施し全員の「陰性」の結果を確認してからの出発でした。

羽田空港到着後、バスにて移動し防衛省市ヶ谷地区を視察、防衛省市ヶ谷庁舎は、新宿区市谷本村町に所在する防衛省施設で、陸上自衛隊は市ヶ谷駐屯地、海上自衛隊は市ヶ谷地区、航空自衛隊は市ヶ谷基地と呼称されています。防衛省本省（内部部局）のみならず陸上・海上・航空の 3 幕僚監部、そしてこれらを更に統べる統合幕僚監部も所在する日本国防衛の中核であります。

意見交換の場では、日本国の防衛状況、沖縄尖閣列島の状況、自衛隊と海上保安庁の連携等、内容充実の意見交換ができました。また、市ヶ谷記念館を見学、庁舎 A 棟の場所にかつて存在した「1 号館」を歴史的建造物として移築・復元し記念館とした建物であり、昭和 21 年（1946 年）に極東国際軍事裁判が開かれた大講堂や三島由紀夫が憲法改正のため自衛隊の決起（クーデター）を呼びかけた後に割腹した事件の舞台上、当時の状態が保存されており貴重な体験ができました。その後、周辺の自然と調和し、市民に開かれた「森のスタジアム」をコンセプトに建設された新国立競技場の外観を見学しました。平和の祭典東京五輪の余韻を味わうことができました。



防衛省市ヶ谷庁舎



新国立競技場

視察2日目は、明治10年(1877)年に創立された自然史・科学技術史に関する国立唯一の総合科学博物館である国立科学博物館を見学しました。当博物館は、自然史及び科学技術史の中核的研究機関として調査・研究、標本・資料の収集・保管・管理・活用、展示・学習支援活動を通じ、人々が地球規模課題を含む地球や生命、科学技術に対する認識を深め、地球と人類の望ましい関係について考察することに貢献する使命を担っているとのことでした。

また、博物館の見学にあたり研究員の方から事前説明を受けました。その説明された研究員の中に2名の沖縄出身の方がいて沖縄県内での調査・研究も行っているとのことでした。国内の中核的研究機関での県出身者の活躍ぶりにとても嬉しく思いました。国立科学博物館では、数多くの展示物、資料等があり限られた時間では全てを見学することができませんでしたが、改めて日本の自然史・科学技術史触れることができました。

その後、神奈川県横須賀へ移動、昼食後、海上自衛隊横須賀基地を訪問し護衛艦「おおなみ」へ乗船しました。護衛艦「おおなみ」は、平成15年3月に就役したヘリコプター搭載型護衛艦で、様々な情報や多数の武器をコンピューターによって集中管理・管制し、空中、水中からの脅威に対しても迅速に対処し得る能力を有しているそうです。

艦上で海上自衛隊の目標、活動等の説明を受け艦内を案内していただきました。今回の視察では、近年の安全保障環境が大きく変化する中で改めて海上自衛隊の役割、活動の重要性を学ぶことができました。

護衛艦「おおなみ」を下船後、海上自衛隊横須賀基地や米軍横須賀海軍施設に停泊するイージス艦、潜水艦、砕氷艦「しらせ」など各艦船を海上から間近に眺めながら横須賀軍港クルーズを行いました。



国立科学博物館



横須賀基地

視察 3 日目は、人々の心を惹きつける神聖で荘厳な山である富士山の魅力を広く世界に発信するとともに、富士山を未来に向けて守り伝える保全の拠点、また、観光を中心とした地域振興の拠点となる富士山世界遺産センターを視察しました。展示室には、世界遺産登録証が掲げられており、内容は、『～世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約～ 世界遺産委員会は、「富士山-信仰の対象と芸術の源泉-」を世界遺産一覧表に記載しました。一覧表への記載は、文化遺産又は自然遺産としての顕著な普遍的価値を持ち、全人類の利益のために保護を要する遺産であることを証明するものです。 イリーナ・ボコバ ユネスコ事務局長』とありました。

今回の視察を通し富士山の圧倒的なまでに悠々とした存在感を感じることができ、富士山が顕著で普遍的価値を持つ文化遺産及び自然遺産であることを改めて理解することができました。また、富士山世界遺産センターの 4 つの基本コンセプト「守る」「伝える」「交わる」「究める」は、沖縄・奄美の世界自然遺産登録後の自然保護とその利活用について参考になりました。

その後、ワイン県である山梨県甲府市勝沼ぶどうの丘へ移動しました。甲州ワインの歴史は、明治 7 年 (1874) 甲州葡萄の本格醸造を開始し、翌年から販売されました。これが日本ワイン史のあけぼのとのこと。山梨県のワイン産業への地道な取り組みが今に至っており、世界に誇るワインを生み、育てる情熱を感じることができました。また、甲州市推奨の約 200 銘柄・約 2 万本のワインを一堂に揃えたワインカーヴ (地下ワイン貯蔵庫) で試飲用タートヴァン (きき酒杯) を購入することで 180 種類のワインを試飲することができました。

今回の勝沼ぶどうの丘視察は、山梨県の県産ワインのブランド化と販路開拓の一環として様々な取り組み、山梨ワインの海外輸出プロジェクト、約 100 年前の近代産業遺産を活用したトンネルワインカーヴの施設整備等を学ぶことができました。その取り組みは、沖縄の泡盛産業への取り組み事例として大変参考になりました。

それから、甲州市勝沼ぶどうの丘を後にして恵林寺・武田神社を参拝することができまし

た。恵林寺は、臨済宗妙寺派の名刹であり禅僧の夢窓国師によって開かれ、その後戦国最強の武将と言われた武田信玄が菩提寺に定めました。偶然にも参拝した11月3日が、武田信玄の生まれた日であり生誕500年の年にあたるということでした。また、武田神社宝物殿では、蘇る戦国の遺香である収蔵品から戦国の世に文字通り命を賭け、天下統一の夢に心血を注いだ武士たちの情熱を感じることができました。



富士山世界遺産センター



恵林寺・武田神社

視察4日目は、東は後立山、西は立山連峰に囲まれ、北アルプスの豊かな大自然に抱かれ、えん堤の高さ196mと日本一を誇り、長さ492mとなだらかな美しいアーチを描き、観光放水で流れる水量は圧巻の毎秒10t以上で知られる世界屈指の黒部ダムを視察することができました。黒部ダムは、黒部川第四発電所、通称「くろよん」の名で親しまれる関西電力の水力発電用ダムです。扇沢駅と黒部ダム駅を結ぶ全長5.4kmの関電トンネルを電気バスに乗って黒部ダムに向かいました。最大13度の急勾配の関電トンネル内は、夏でも気温は10度前後であり、苦闘の末に突破した大破碎帯から現在も流れる水を見ることができました。

また、黒部ダム駅から220段の地中階段を登り着いたダム展望台からは黒部ダム全景と立山連峰を一望することができました。新展望広場特設会場内では、黒部ダム建設の歴史をパネルや映像で楽しめる他、石原裕次郎記念館から移設された映画「黒部の太陽」のトンネルセット（レプリカ）を展示されていました。それと、建設工事では171名の方が犠牲になっており、その方々のお名前を刻んだプレートとレリーフが掲げられていました。黒部ダムでは、エネルギーの安定供給かつカーボンニュートラルの実現に向けて知見を深め、脱炭素に向けた再生可能エネルギーとしての水力発電の現状や運用について学ぶことができました。また、黒部ダムの迫力に圧倒されるとともに当時のダム建設に関わった人々の熱い情熱、多くの犠牲になられた方々に思いを馳せる視察となりました。

昼食後、極楽浄土の入り口、一生に一度訪れれば、往生がかなうと信じられている善光寺

を参拝することができました。善光寺は、日本に仏教の諸宗派が生まれる以前に創建された寺院であることから、宗派を問わない、男性・女性、貴賤を問わない、無差別、平等のお寺であることから全国から参拝者が毎年大勢訪れる寺です。また、善光寺は無宗教であるがゆえ、生きている間に参拝できなくても、死んだらどの宗派の人でも一度は善光寺に足を運ぶという言い伝えがあるとのことでした。

善光寺では、本堂の地下お戒壇巡りを体験しました。真っ暗闇の中を右手で腰の高さを右回りに壁をつたって進んで行くと本尊の真下に錠前があり、この錠前は「極楽の錠前」と呼称されており、錠前に触れるとことで来世の極楽浄土が約束されているとのこと、今回は、直接、手で触れることができご利益をいただくことができました。



黒部ダム



善光寺

視察 5 日目は、上信越高原国立公園の一部である長野県下高井郡山ノ内町とその周辺一帯に広がる高原で春から夏にはハイキング、秋は紅葉、冬はスキーと一年を通して観光客が絶えることのない志賀高原を視察しました。視察にあたり志賀高原観光協会の担当者の方から志賀高原の SDGs への取り組みについてご説明を頂きました。本取り組みでは環境学習を通して「自然と人間社会の共存」を学び、持続可能な社会づくりの担い手を育成することを目指しています。また、「志賀高原×SDGs STUDY TOUR」では自然の保護だけでなく自然環境や生態系を保全しつつ、これらを持続可能な方法で活用することで、自然と人間活動の調和を目的として自然に学ぶとともに、文化的にも経済・社会的にも持続可能な発展を目指す「自然と人間社会の共存」を実践するため「保全機能」「経済と社会の発展」「学術研究支援」の 3 つの機能を持つモデル地域として国際的に認定されている「生物圏保全地域（ユネスコエコパーク）」などの取り組みについて学ぶことができました。今回の「自然と人間社会の共存」は、世界自然遺産登録された今後の沖縄・奄美の取り組みへも大変参考になる内容でした。

その後、石川県金沢へ移動し、「ふるさとのありように心を砕く」を活動の理念に掲げている金沢経済同友会と懇親会を開催しました。北陸新幹線金沢開通後の経済状況、またコロナ禍における地域経済活動への影響、そして今後の見通しなど多くの意見交換を行い、相互の親睦を深め有意義な懇親会となりました



志賀高原



金沢経済同友会との懇親会

視察6日目は、視察最終日、水戸偕楽園、岡山後楽園とならぶ日本三名園の一つに数えられる、加賀藩によって金沢城の外郭に造営された廻遊式の庭園である「兼六園」に立ち寄ることができました。兼六園は、宏大・幽邃・人力・蒼古・水泉・眺望の6つの景観を兼ね備えていることから命名されたとのこと。魅力引き立つ景観を楽しみながら回遊する庭園を沖縄観光の参考にできないものかと思入ってしまいました。

視察終了後、石川県小松空港発、那覇空港着をもって全ての日程を無事終了することができました。今回の沖縄経済同友会長期国内視察（東京都・神奈川県・山梨県・長野県・石川県）もコロナ禍での日程でしたが、出発の一週間前からの検温と健康管理、出発直前にPCR検査を行い全員「陰性」を確認後出発、視察終了後再度PCR検査を行い全員「陰性」をして無事に視察を終えることができました。

今回の視察は、全国的に感染者数が減少傾向にあり多少落ち着いた状況での視察でしたが、昨年同様感染拡大防止策と社会経済活動の両立を図りながらの旅となりました。

今回も多くの都県を跨ぐ長旅の視察となりましたが、全ての視察先での学びは実り多く、また、道中日本の四季に触れ、寺院・神社への参拝などにて奥深い癒しを得ることができ大変有意義な視察を行うことができました。

最後に長期国内視察（東京都・神奈川県・山梨県・長野県・石川県）にあたって、ご協力いただきました各視察先の皆様並びにご参加くださいました皆様へ深く感謝を申し上げます。全体総括とさせていただきます。

4. 視察報告

(1) 防衛省市ヶ谷視察

視察 1 日目、沖縄における自衛隊の配備計画など、南西地域の安全保障の現状について知見を深めることを目的に市ヶ谷にある防衛省を訪問し意見交換会を行った。

意見交換会には、前・南西航空方面隊司令官の統合幕僚副長 鈴木康彦空将、防衛省地方協力局長 岡真臣氏をはじめ、地方協力局や整備計画局の方にご出席頂いた。

はじめに「自衛隊の体制整備（南西地域における防衛態勢）」について整備計画局より説明があった。概要を以下に示す。

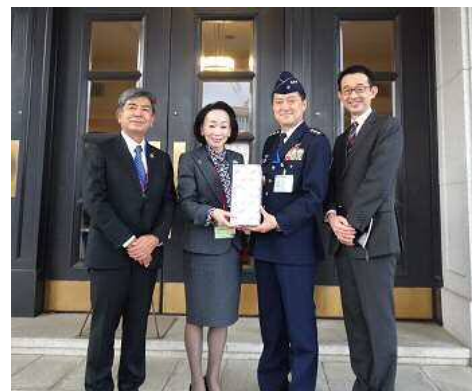
(概要)

- ・ 現在、沖縄本島には陸上自衛隊、海上自衛隊、航空自衛隊のそれぞれで以下の部隊が主に配備されている。陸上自衛隊は、第 15 旅団等を約 2480 名、普通科部隊、ヘリ部隊、後方支援部隊、高射特科部隊を配備。海上自衛隊は、第 5 航空群等を約 1450 名、固定翼哨戒機 P-3C 約 20 機、掃海艇 2 隻を配備。航空自衛隊は、南西航空方面隊等を約 4040 名、F15 戦闘機約 40 機、ペトリオット 4 個高射隊、早期警戒機 E-2C を 4 機程度を配備している。
- ・ 他、沖縄の離島には、陸上自衛隊の与那国沿岸監視隊等の約 170 名や、宮古島の警備隊、地对艦誘導弾部隊、地对空誘導弾部隊の計 710 名が配備されており、令和 4 年からは石垣島にて警備隊、地对艦誘導弾部隊、地对空誘導弾部隊の配備を予定している。なお、地对艦は海から艦船を用いて攻撃された場合、地对空は空から戦闘機や巡行ミサイルで攻撃された場合の対応を想定している。
- ・ 日本を取り巻く安全保障環境を見れば中国が一番の脅威となる。習近平の「強国であるには強軍でなければならず、軍が強くてこそ国を安じることができる」とのコメントにあるとおり、中国は軍事力強化を進めている。日本の防衛関係費は約 5 兆円であることに対し、中国は公表されているだけでも約 20 兆円であり 4 倍程度の開きがある。「2035 年までの軍隊近代化、2050 年頃までの世界一流の軍隊建設」を目指し、国防費は右肩上がり増加しており、しばらくこの傾向は続くだろう。海軍力で日本と中国を比較した場合、近代的潜水艦で日本 21 隻／中国 52 隻、近代的駆逐艦・フリゲート艦で日本 47 隻／中国 71 隻と数の面で中国が大きく上回る。また、航空分野においても、第 4 世代・第 5 世代戦闘機の保有状況においても、日本 313 機／中国 1146 機と中国が大きく上回っている。また、米国と中国の軍事力を比較した場合、全体国防費では米国 6540 億ドル／中国 2835 億ドルと米国が上回っている。しかし、米軍の戦力をハワイより西側に限定した場合、宇宙・航空・海上・ミサイルの各分野において中国の戦力の方が大きくなり、2025 年にはさらに戦力差は開いてくるものと予想される。

- ・ 台湾と中国の軍事バランスは中国に有利な方向に変化しており、年々その差が拡大している。中国は台湾に対し「武力使用放棄を約束せず、必要なあらゆる措置を選択肢として保有する」とコメントしており、中台間の緊張（武力衝突）はバシー海峽を通過する我が国のシーレーンを不安定化させるものであり、日本の経済活動に大きな損失を与える。台湾をめぐる情勢の安定は日本の安全保障にとって重要であり、引き続き注視していく必要がある。
- ・ 日本の防衛の三本柱は「我が国自身の防衛体制」「日米同盟」「安全保障協力」であり、日本自身の主体的な防衛体制の強化が根幹である。日米安全保障条約に代表される日米同盟では幅広く協力し、抑止力／対処力を向上させるとともに、安全保障協力の面では自由で開かれたインド太平洋構想（FOIP）や日米豪印戦略対話（QUAD）のような多角的・多層的な安全保障協力を推進していく必要がある。

説明終了後、「尖閣で武力衝突が発生した場合の県経済への影響」「想定しうるワーストシナリオに対する準備」「人員及び装備品の近代化による抑止力向上」等について、参加者から多くの質問があった。弊会からの質問に対し、防衛省の皆様からは、ひとつずつ丁寧な回答を頂戴した。

意見交換後は、市ヶ谷構内にある市ヶ谷記念館の視察を行った。終戦後、東京裁判の法廷として利用され、また1970年には三島由紀夫事件の現場となった歴史的な建築物である。講堂における扉を小さく見せるための床の傾斜や、床材として敷き詰められているナラ材の緻密さは、現地を見てみて、改めて当時の設計・建築技術の高さを感じるものであった。





【意見交換を終えて】

第一列島線上に位置する沖縄にとって、米中対立や台湾海峡問題は他人事ではなく、身近にある非常に重要な問題として、常に最新の情勢を注視していかねばならない。今回、防衛省市ヶ谷を訪問させて頂き、南西地域における自衛隊の体制整備や周辺国の状況について情報収集ができたのは非常に有意義であった。防衛省・自衛隊には沖縄勤務経験を持つ方が多く、離任後も沖縄に対する愛着・想いを感じる。引き続き、沖縄経済界と自衛隊関係者との意見交換を継続して行い、相互理解を深めていければ幸いである。

なお、今回の防衛省市ヶ谷訪問にあたっては、全員の出発前 PCR 検査陰性およびワクチン 2 回接種済を確認している。コロナ禍の中、弊会との意見交換を受け入れて頂いた防衛省の皆様には、この場を借りて御礼申し上げる。

(2) 新国立競技場視察

視察 1 日目、防衛省市ヶ谷の視察後に「新国立競技場」を經由し、お台場や有明の各競技会場、晴海の選手村をバス車窓より視察した。新国立競技場については、当初視察先として検討していたが、東京オリンピック終了後の改装工事のため外観のみの視察となった。

弊会では、夏に東京オリンピック視察を予定していたものの、新型コロナウイルス感染拡大により無観客開催となったことで視察が中止となった経緯がある。沖縄県においても MICE を含む国際的な大規模イベントの誘致を目指しており、外国人客の受入体制、大会運営、開催地文化の発信等について、東京オリンピックの開催実績から学ぶことは多い。さらに、大規模イベント開催後の既存施設の運用管理やレガシーの活用についても、東京オリンピックから学ぶべき点が多くある。また別の機会に改めて詳細な視察等を企画していければと考えている。

(3) 国立科学博物館視察

視察2日目は「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の世界自然遺産登録を受け、自然史博物館誘致に関する知見を深めることを目的に、自然史・科学技術史において国立の唯一の総合科学博物館である国立科学博物館の視察を行った。

はじめに篠田館長よりご挨拶を頂戴した後、博物館の概要や役割、自然史標本の収集保管業務、自然史科学の調査研究等について、それぞれの部門担当者様よりご説明頂いた。

概要を以下に示す。

(概要)

- ・ 国立科学博物館の使命は、自然史及び化学技術史の中核的研究機関であるとともに国の主導的な博物館として調査／研究／収集／保管／展示等による有機的に連携した一体的な展開に取り組むことであり、また人々が地球規模課題を含む生命や科学技術に関する認識を深め、地球と人類の望ましい関係について考察することである。
- ・ 標本データを用いて日本の絶滅危惧植物の分布を可視化すると、1位小笠原の父島、2位石垣島、3位南アルプスである。8位には沖縄本島北部地区（やんばる）が挙げられており、トップ10に沖縄の2地域が選出されていることから、生物学的に見て琉球列島が重要な地域であることがわかる。標本や文献データをもとに琉球列島の植物チェックリストの見直しが必要であるが1997年以降実施できていない。なお、国立科学博物館では「一般社会に広く研究成果を還元することは博物館の使命」であるという考えから、2018年より「琉球の植物データベース」をホームページにて一般公開しており、関心があれば誰でもアクセスできる環境整備を行ってきた。
- ・ 琉球列島は温帯と熱帯の間接的な気候帯である亜熱帯性気候に属する。地球規模で見ると、亜熱帯性気候はユーラシア・アフリカ・オセアニア・アメリカ大陸に存在するものの、砂漠が多くを占める乾燥した地域であり、琉球列島のように豊富な雨量を持つ湿潤な亜熱帯性気候となると世界的にも珍しい。この貴重な気候帯である琉球列島は日本で最も生物多様性が高い地域であるとともに、滅絶危惧種の集中するホットスポットでもある。
- ・ 琉球の植物データを各島の単位面積あたりの種類数で評価した場合、島の面積の割に種類数が多いのが石垣島、久米島、与那国、伊平屋島、伊是名島であった。一方、南・北大東島や尖閣諸島は面積の割に植物の種類数が少ないという結果であった。沖縄の自然史と文化に関する調査の結果、御嶽や城跡内に多くの琉球固有植物や絶滅危惧種が生息していた。御嶽など信仰の対象となる区域については、大規模な伐採などが禁止されていることで、植生が保存されており大きな自然史価値を有する。

講話後、「日本列島の自然と私たち」をテーマとした日本館と、「地球生命史と人類」をテーマとした地球館の常設展示視察を実施した。



【視察を終えて】

沖縄からの訪問ということで、博物館側の配慮により琉球列島の植生や自然史等について充実した内容をご講話頂き、改めてその生物多様性や希少性の価値を再認識する機会となった。また、説明者には県出身者2名が含まれており、国内最高峰の博物館で県出身が活躍していることを非常に嬉しく思う。また今回、国立博物館からは、入園者数や職員数と併せて、自己収入と運営交付金を含む予算額の推移についても情報提供があった。予算と関連し、賛助会や寄付金等の活動を積極的に行っており、運営面での努力を垣間見ることができた。沖縄における国立自然史博物の誘致にあたっては、施設を作ることが目的ではなく、持続的な事業活動を見据え、予算等の運営面についても議論を深める必要があることを再認識した。コロナ禍の中、弊会視察を受け入れて頂いた国立科学博物館の皆様には、この場を借りて御礼申し上げます。

(4) 海上自衛隊横須賀基地視察

視察2日目、南西地域における海域の防衛力強化に関する知見及び援護広報活動への理解を深めることを目的に海上自衛隊横須賀基地の視察を行った。

はじめに、港内に停泊している護衛艦おおなみに乗艦し、梶山艦長からのブリーフィング後、米田二尉の案内により艦内見学を実施した。2003年に就役したおおなみは、全長151m、基準排水量4650tのヘリコプター搭載型護衛艦であり、54口径127ミリ速射砲、高性能20ミリ機関砲、垂直式発射装置(VLS)、90式艦対艦ミサイルなどの兵装を持つ。近年ではソマリア沖の海賊対策や、ベンガル湾で実施した日米印豪共同訓練(マラバール2020)へ参加し、自由で開かれたインド太平洋構想(FOIP)の実現に向けて、関係国海軍との共同訓練を通じた関係強化に貢献している。なお、艦名「おおなみ」の由来としては、読んで字の

ごとく大きな波として自然の脅威を表し、非常に猛々しく威勢のあるものの喩えとして引用された。建造年が寅年だったこともあり、猛々しく強い虎の如くあれとの願いを込めて、艦シンボルは虎となっている。

巨大な速射砲、哨戒ヘリコプターが搭載できる甲板の広さなど、艦上で実物を見ると、写真で見たときとは異なる予想以上の迫力であった。

その後、小型船舶に乗り換え、洋上より海上作戦センターまで移動した。港内には沖縄ではお目にかかれない潜水艦も停泊しており、黒い巨体が水面に浮く姿はまさに「鉄の鯨」と比喻されるものであった。また移動途中において、タイミングよく入港する護衛艦いずもとすれ違うことができ、F-35B 戦闘機が発着艦できる大型艦を目の前で見ることができた。また海上自衛隊横須賀基地は米軍横須賀海軍施設と隣接しており、洋上からは第 7 艦隊の原子力航空母艦ロナルド・レーガンの巨体を見ることができたのは非常にいい経験であった。



到着した海上作戦センターは、2020年10月に運用開始された新しい建物であり、自衛艦隊司令部、護衛艦隊司令部、潜水艦隊司令部、掃海隊群司令部、海洋業務・対潜支援群司令部、艦隊情報群司令部が集約されている。これまで点在していた司令部が集約されたことで、最前線の状況が即時かつ広範囲に把握でき、一元的でスムーズな部隊運用が可能となった。海上作戦センターでは、元・第5航空群司令の自衛艦隊司令部幕僚長 市田章海将補よりご挨拶を頂戴した後、伊勢1等海佐より、海上作戦センターの役割等について説明があった。概要を以下に示す。

(概要)

- 海上自衛隊の自衛艦隊は横須賀に護衛艦隊、潜水艦隊、掃海隊群、海洋業務・対潜支援群、開発部隊、艦隊情報群を持ち、そこに厚木基地の航空集団を加えて編成されている。自衛艦隊は、水上艦艇約80隻、航空機約190機、潜水艦約20隻を持ち、隊員は約28000名であり、海上自衛隊全体の2/3を占める。

- ・ 日本の警戒監視について、海上自衛隊では P-3C 哨戒機等により北海道周辺、日本海及び東シナ海を航行する船舶を監視している。また、航空自衛隊では早期警戒機、レーダーサイト等により周辺空域を監視しており、陸上自衛隊では沖縄の与那国、宮古島のように沿岸監視隊の配置により警戒監視を行っている。
- ・ 国連安保理決議において北朝鮮籍船舶等に対する洋上での船舶間の物資の積み替え等が禁止されており、その実効性確保のため、海上自衛隊では日本海周辺における警戒監視及び情報収集を実施している。他、アメリカ、オーストラリア、イギリス、フランスなど各国が航空機や艦艇等による警戒監視に従事している。
- ・ 沖縄を含む島嶼部に対する攻撃への対応として、常時継続的な情報収集や警戒監視などにより、その兆候を早期に察知し、海上優勢・航空優勢を確保する。侵攻が予想される場合、部隊を早期に起動・展開し、侵攻部隊の近接や上陸を阻止する。なお、万が一占拠された場合には、艦艇や航空機による対地攻撃により制圧後、陸上自衛隊部隊を上陸させるなどあらゆる措置を講じて奪回を図る。自衛艦隊では、精強／即応／常在／進化を勤務方針とし、我が国の領域及び周辺海域の防衛、海上交通の安全確保ならびに望ましい安全保障環境の創出のため、全力で職務を完遂する所存である。



【視察を終えて】

視察 1 日目の防衛省市ヶ谷では意見交換や机上学習を主としていたのに対し、2 日目の横須賀基地では護衛艦への乗艦を含め現場・実機を見ながらの視察を主としていた。実際の護衛艦への乗艦は沖縄で経験できるものではなく、艦内の状況や甲板・装備品についても初めて見るものであり、艦上の速射砲など実物は予想をはるかに上回る迫力であった。視察時、波の穏やかな内湾に停泊している状況においても、艦上における移動ならび階段の上り下りには相当の注意を払うものであった。外洋において大きな揺れがある中、不安定な足元で日頃の監視業務・訓練を行う自衛官には頭が下がる思いである。

また、海上作戦センターまでの洋上移動中、そこから見える施設や艦の役割等について会員

から多くの質問をさせて頂いたところ、現場自衛官の皆様からは実務等を踏まえた丁寧な回答があった。なお、港内には南極観測船「しらせ」も停泊しており、その理由について尋ねたところ「砕氷艦」という扱いであり、南極大陸までの往復含め、その運用は海上自衛隊に所属するものであるとのことであった。

今回の海上自衛隊横須賀基地視察にあたっては、全員の出発前 PCR 検査陰性およびワクチン 2 回接種済を確認している。コロナ禍の中、視察を受け入れて頂いた横須賀基地の皆様には、この場を借りて御礼申し上げる。

(5) 富士山世界遺産センター視察

視察 3 日目、2021 年 7 月の「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の世界自然遺産登録を受け、国内外への情報発信ならびそれを契機とした地域振興を学ぶため、先に世界文化遺産に登録された富士山における取り組みを展示する「山梨県立富士山世界遺産センター」を訪問した。

最初に南館に入ると巨大な富士山のオブジェが目に入る。そこでは富士山が持つ「信仰の対象」と「芸術の源泉」について、富士北麓参拝曼荼羅の大規模絵画をはじめとしたパネルや映像により体験的かつわかりやすく展示されている。なお、「信仰の対象」については、富士山を神格化する想いと合わせて、自然と手を合わせて拜んでしまう富士山の美しさや荘厳さから生まれる信仰を指す。「芸術の源泉」については、富士山をモデルとした絵画、写真・文学のように、富士山がインスパイアする力や芸術の源泉となるものを指す。

豊かな自然と人々の営みが生み出した信仰と芸術、その魅力を次世代に引き継ぐことが重要であり、その思いは万葉集にある「語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 富士の高嶺は」との一句からも読みとることができる。

【視察を終えて】

今回の視察を通して学んだことは、世界自然遺産に登録されたからといって新たに特別な対応をとるのではなく、大自然が持つ魅力や普遍的な価値を徹底的に深掘りし、旧来から存在する地元生活との共存に配慮した上で、観光客が求める感動体験が何なのかを熟考することが重要とのことであった。結果的にそれが持続的な観光資源として活用していくための重要な施策となる。世界遺産に登録される条件として「顕著で普遍的な価値を有すること」「完全性を満たしていること（価値を示す十分な規模と要素を持っていること）」「その価値が将来にわたって守られること」がある。この 3 条件を念頭に、沖縄においても、自然環境保全と地域振興の両立に向けて「適正な観光管理」を実現していくため、観光全体の管理計画（受入観光客数の管理）、入域料（法定外税）、自然フィールドの利用ルールとガイド事業者の認定制度など取り組むべき課題が多くある。観光客を多く受け入れれば地域が潤うという単純なものではなく、地域住民の意見交換を実施しながら理解を深め、皆が「世界遺産に登録されてよかった」と思える地域を目指していきたい。



(6) 甲州市勝沼ぶどうの丘

視察3日目、昼食のため甲州市勝沼ぶどうの丘に立ち寄った。甲州市勝沼地区は、明治時代に日本で初めてワインが醸造された地域であり、市内には35社を超える大小さまざまなワイナリーが点在し、ブドウの栽培、ワインの醸造および販売に取り組んでいる。

訪問日当日は、祝日かつ山梨県産の新酒ワイン解禁日であり「山梨ヌーボーフェア」が開催されていた。新酒ワインサーバー（100円/20cc）や地元の食事ブースが出店しており、晴天の下、屋外ベンチでワインを楽しむ人や多くの家族連れで賑わっていた。また、地下には市内のワイナリーで醸造された約200種類・約2万本のワインが貯蔵されており、利き酒用のタートヴァンを片手に自由に試飲するワインカーブが整備されている。販売用のワインショップにもバラエティに富んだ関連商品が並んでおり、1階レジ前には試飲後に好みのワインをお土産用に購入する人で長い列ができていた。

沖縄には日本最古の蒸留酒である地酒泡盛があり、本島離島ふくめ48カ所の酒造所で製造されている。しかし、年々消費量が減少し、泡盛離れが進む中、当施設のように多くの酒造

所の商品を集約し、観光客や地元客向けに年間を通して泡盛を楽しんでもらう観光施設が必要ではないか。県内外に向けて泡盛文化の発信力強化と消費量の拡大を目指し、性別・年齢に関わらず多くの人を惹きつける甲州ワインの取り組みは非常に参考になるものであった。



(7) 恵林寺・武田神社

視察3日目、甲州勝沼ぶどうの丘を出発後、近隣にある恵林寺・武田神社を参拝した。恵林寺は戦国随一の武将である甲斐の虎・武田信玄の菩提寺である。武田信玄は天正10年(1521年)の生まれであり、今年2021年はちょうど生誕500年の年にあたる。さらに弊社が訪問した11月3日は武田信玄の生まれた日と言われており、まさにその節目の日に恵林寺・武田神社を訪問できることに感慨深いものがあった。信玄公は、周囲を山々に囲まれた甲府盆地において「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵なり」という有名な和歌に評されるように、民を第一にした国づくりを行ったと言われる。また、甲府には信玄堤に代表されるように信玄公の名が多く残っており、生誕から500年、今なお地元の人から愛される戦国の英雄に思いを馳せることができた。



(8) 黒部ダム視察

視察 3 日目、エネルギーの安定供給かつカーボンニュートラルの実現に向けて知見を深めることを目的に関西電力が営業運転を行う黒部ダムを視察した。

2020 年 10 月に菅元首相より「我が国は、2050 年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする、すなわち 2050 年カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現を目指す」ことが宣言された。また、2021 年 4 月の米国主催気候サミットにおいて、当該長期目標の達成に向け「2030 年度において温室効果ガスの 2013 年度からの 46%削減を目指す」ことが宣言された。沖縄のエネルギー分野においても、沖縄電力から「2050 年 CO2 排出ネットゼロ」を目指すゼロエミッションの目標が掲げられ、エネルギー部門における脱炭素に向けた取り組みがスタートしている。一方、島嶼地域であり大規模な河川がなく、降雨がすぐ海に流れ出てしまうという地理的な制約、また、他地域と連携されていない小規模の独立系統であるという需要規模の制約により、現時点で取り得る温暖化対策は限定されている。さらに小規模かつ独立系統のため、変動の大きな再生可能エネルギーの接続量も制限されやすい。沖縄の実状を踏まえ、他地域の先行事例を学ぶべく、出力 335,000kW という大規模な水力発電を持ち、世紀の大プロジェクトと言われた黒部川第四発電所（黒部ダム）の視察を行った。水力発電については、化石燃料とは異なり、地産地消の純国産エネルギー源であることから、世界情勢の変化に左右されず安定供給が可能であり、また為替や市場を通じた価格変動を受けにくいという利点がある。さらに温室効果ガス削減の面からも、ダム化により貯蔵性が高く、利用するタイミングで必要量を取り出すことのできる水力は、太陽光や風力のよように自然影響の急変を受けにくいというメリットもある。





【視察を終えて】

エネルギーの安定供給を考えるにあたり、戦後復興期に関西地方の電力不足が深刻になる中、昭和31年に着工し昭和38年の完成まで7年の歳月を費やした黒部ダム建設については、実際に大町トンネルをバスで通行する距離の長さ、その途中で見える破碎帯から流れる地下水の流れ、保存された当時の状態の掘削現場を見て、その苦労を肌で感じることができた。また171名の尊い犠牲にあるように、この難工事に命懸けで挑み、難局を乗り越えた使命感と情熱については頭が下がる思いである。

近い将来、沖縄においても、脱炭素に向けて化石燃料から再生可能エネルギーへの転換が進む。地形的に大規模な水力発電の開発が困難という制限が残るものの、一部の地域では、多孔質である琉球石灰岩の性質を活用した地下ダムなど類似の未利用エネルギーが存在する。それと併せて、効率よくエネルギーを取り出す技術革新が進めば、小規模河川、上下水道、農業・工業用水等の未利用エネルギーについても、マイクロ水力発電の数を確保することで安定した再生可能エネルギー源として期待できるのではないか。「水」が持つエネルギーとしての可能性を目にするともに、電力の安定供給についても考えさせられる有意義な視察であった。

(9) 善光寺

視察 3 日目、観光を目的に長野市にある善光寺を参拝した。「遠くとも一度は参れ善光寺」と言われるように年間 600 万人が訪れる国内有数の観光地である。1707 年に再建された本堂は江戸時代中期を代表する仏教建築として国宝に指定されており、さらに国の重要文化財に指定されている山門や多くの参拝客で栄えた仲見世通りなど歴史を感じる建造物が多く残る。また、今回の参拝にあたり善光寺本堂地下にあるお戒壇巡りを体験した。光のない暗闇に身を置くことでどのような効用が得られるのか、その目的について紹介したい。

(以下、善光寺ホームページより一部を抜粋)

お戒壇の中での暗闇は、無差別平等の世界をあらわしているものとされております。私たちは、日頃、余計なものに眼を奪われて、ものの本質を見誤ったり、争ったり、嫉妬したり、むさぼったりして、結果は悩みに陥るのです。ところが、暗闇の中では、私たちは種々のとらわれの心を離れ、極楽のお錠前を探し当てることに専心します。つまり、仏様の世界に入って行くことができるのです。

私たちのところの中には仏になる種が植えられています。仏種（ぶっしゅ）とも仏性（ぶっしょう）とも申します。ダイヤモンドは最初から光り輝いている訳ではありません。原石に磨きをかけることで美しい輝きを放つのです。私たちのところも同様です。お戒壇巡りをさせていただくと、眼の不自由な方の日々の苦しみ、不安をご理解いただけることと思います。そうした方々に手を差し伸べる、そんなわずかな親切が、心の仏種に水をくれることなのです。日常の小さな親切、思いやりの精神こそ、ところの中にあるダイヤモンドの原石を磨くことに他なりません。

お戒壇巡りをされる際には、阿弥陀如来様からご縁をいただくことで、皆様のところの中にある「仏となる種」を大きく育てているのだ、という気持ちでお参りされますと、より一層有意義なものとなるのではないのでしょうか。



(10) 志賀高原 SDGs 視察

視察 5 日目、沖縄における持続可能な観光産業の発展に向けて知見を深めるべく、先進的な取り組みを行う志賀高原の視察を行った。はじめに志賀パークホテルの小根澤社長よりご挨拶を頂戴した後、志賀高原の SDGs に関する取り組みについて、志賀高原観光協会様よりご説明頂いた。概要を以下に示す。

(概要)

- ・ 志賀高原は、日本を代表するスキーリゾートであり、ユネスコエコパークの認定を受けるなど高い認知度を持つ一方、観光客が冬季シーズンに集中することによる非正規雇用の増大、インバウンド対応の人材不足、高度経済成長期に設けた大宴会場などの課題を持つ。これらを解決するため、春から秋にかけてのグリーンシーズンの稼働率向上により年間を通して安定雇用を生み出そうという動きがはじまった。
- ・ 「志賀高原×SDGs STUDY TOUR」のきっかけは、修学旅行者向けの学びの分野における差別化戦略と、団体需要が減少傾向である近隣観光地との差別化を図るため、地域のサステナブルな取り組みを観光資源としてコンテンツ化しようとの動きから始まった。太古の原生林が残る自然の中での環境学習を通して「自然と人間社会の共存」を学び、持続可能な社会づくりの担い手を育成することを目的とし、現在 18 のプログラムを用意している。内包する効果としては、関係人口の増加や地域経済活性化による地方創生、地域と教育現場の連携による産官学連携、県内宿泊に売上増に直結する他地域との差別化、観光地として領域拡大などのメリットがある。
- ・ ユネスコエコパークについては、自然環境や生態系を守りつつ、その自然を有効活用し、地域や人間社会が発展することを目的とした「自然と人間社会の共生」を実践するモデル地域である。持続可能な社会の構築でいえば、SDGs 達成に向けたモデル地域ともいえる。しかし、はじめからユネスコエコパーク登録を目指して活動を行ったのではなく、元々行っていた活動がユネスコエコパークの趣旨に合致していたというものであった。その歴史は古く、昭和 2 年には土地の管理者として和合会が発足、入植に関する権利を地元区民に限定し、大資本による過度な開発を制限してきた。それは山の木を伐採することや水源の利用についても許可がないとできないのはもちろん、生活排水の処理についても自治体行政に任せるのではなく地域でより厳格な基準を設けて運用している。また、屋根の色を統一することや屋外に自動販売機を設置しないなど、景観の管理についても徹底しており、その成果として地域の自然環境が保たれてきた。志賀高原では、原生林が残る核心地域、レジャーや学習で自然を利活用する緩衝地域、住宅地や農地の移行地域の 3 つのゾーニングを行っており、SDGs の活動を行うにあたっては、緩衝地域がもっとも利用頻度の高い地域となる。



【視察を終えて】

志賀高原が SDGs に取り組む理由は、観光振興と環境保全を両立し、事業者の持続可能な経営と観光地の持続的発展を両立するためとのことであったが、この考え方は沖縄を含めすべての観光地に該当するものである。特に夏場が観光シーズンとなる沖縄にとって、通年を通じた観光客の誘致、時期の平準化については長年の課題であり、観光従事者の安定した雇用は質の高いサービス・ホスピタリティへとつながる。そこから生まれる質の高いサービスが沖縄のブランド価値向上に寄与することで、さらなる好循環が生まれ、持続的な観光振興が期待できる。沖縄は今年「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」が世界自然遺産として登録され、独特で豊かな生物多様性を持つ自然環境は「人類共通の宝物」として認められた。世界自然遺産登録はゴールではなくスタートである。今後、経済活動と自然環境保全の保全を両立していくにあたり、志賀高原で実施しているゾーニングや地元観光協会を中心としたガイド育成等の運用方法については非常に勉強になるものであった。

コロナ禍の中、弊社視察を受け入れて頂いた志賀高原関係者の皆様には、この場を借りて御礼申し上げる。

(11) 金沢経済同友会との懇親会

視察 5 日目、他同友会との交流を目的に金沢経済同友会と懇親会を開催した。

金沢は「加賀百万石」で有名な加賀藩前田家の城下町として栄え、日本三名園のひとつである兼六園や加賀友禅など歴史的な建造物や伝統文化が多く残る。また、2015 年には北陸新幹線が開通し、豊かな歴史と文化、日本海で獲れる新鮮な海の幸などが多くの人々を惹きつけ、北陸地方における経済・観光の中心地である。今回の懇親会を通し、コロナ禍における観光産業への影響や今後の経済復興の見通し等に関する地元経済界と有意義な情報交換を行うことができた。

金沢経済同友会では、金沢の歴史や文化を大切にしながら地域経済発展を図ることを目的に、ご当地検定として「金沢検定」を主催しているとのことであった。今年で 17 回目を数え、毎年、初級／中級／上級で計 2000～3000 名の多くの受験者を集める検定である。当検定には石川県や金沢市等が後援に入っており、また金沢大学をはじめとした地元大学も協力者として名を連ねている。産官学が協力し観光人材を育成する取り組みとして非常に有益な施策であった。

以下、金沢検定ホームページより一部抜粋。

金沢検定は、金沢に関する歴史や文化、経済、産業など、さまざまな分野から、あなたの「金沢通」の度合いを認定する検定試験です。金沢の魅力を国内外に発信し、歴史、伝統、文化に彩られた金沢という都市が持つブランド力をさらに高めるために、多くの方々のご賛同とご協力を得て実施しています。この検定試験が、金沢の歴史や文化を学び、ふるさとへの愛着と誇りを再認識する機会になることを願っています。

出題範囲：歴史、文学、寺社・建造物（神社、仏閣、史跡、庭園）、金沢ことば、伝説、生活・行事（祭り、ならわし、料理、菓子）、自然・地理（地名）、美術・工芸（伝統工芸、伝統文化）、芸能、産業・経済、その他（まちづくり、観光、偉人・ゆかりの人物）などの分野から合計 100 問を出題。



(文責：事務局)